

【原 著】

幼稚園教育における人的つながりを支える親支援の方向性

虫明 淑子 西山 修 高橋 敏之

Evolution of the Parents Support through enhanced Social Ties in Kindergarten Education

Yoshiko MUSHIAKE, Osamu NISHIYAMA, Toshiyuki TAKAHASHI

2015

岡山大学教師教育開発センター紀要 第5号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.5, March 2015

原 著

幼稚園教育における人的つながりを支える親支援の方向性

虫明 淑子*¹ 西山 修*² 高橋 敏之*²

本論は、幼稚園教育における親支援の方向性を探ることを目的とする。幼稚園1年間(全5回)の「親の会」を分析したところ、両極的感情と2つの不安を抱える親達は、「安心」「感覚」「ゆとり」を共有する人的つながりを基盤とし、子育てを肯定的に捉えられることが明らかになった。親の興味や欲求に基づく環境を構成し、主体性に働きかける援助をする親支援は、幼稚園教育における子育て支援として有効であることが示唆される。課題は、親の主体性に働きかける環境を構成し、援助する支援者の専門性の確立である。

キーワード：幼稚園教育, 人的つながり, 親支援, 子育て支援, 環境

※1 岡山大学大学院教育学研究科大学院生

※2 岡山大学大学院教育学研究科

本論は、幼稚園教育における親支援の方向性について考察する。本論の前半では、先ず子育てにおける親の両極的感情と育児不安について言及する。次に、我が国における子育て支援と幼稚園における様々な子育て支援について概観する。後半では、幼稚園として、子育てを通して親自身が育ち合える支援を行うためにはどのような方向性が望まれているのか、幼稚園における親支援の実際を通して分析と検討を行う。

I 子育てにおける親の両極的感情と育児不安

1 親の育児不安

柏木恵子(2001)は、『『育児不安』と言えば誰でもすぐわかるくらい広く世の中に知られている、これは実は他国にはないことで、国際学会で『育児不安』について話そうとしても該当する単語がない』⁽¹⁾と、育児不安が我が国特有の問題であることを示唆している。大日向雅美(2002)は、育児不安を「子どもの成長発達の状態に悩みを持ったり自分自身の育てに迷いを感じたりして、結果的に子育てに適切にかかわれないほどに強い不安を抱えている状態」⁽²⁾と述べている。

現代社会における子育て環境とはどのようなものであろうか。ベネッセ教育総合研究所(2011)によると、現代の母親の約半数は、実際に赤ちゃんとの

触れ合いや世話をする経験なしに妊娠・出産を迎える⁽³⁾。主な相談相手については、回答者の8割が配偶者、自分の親、友人・知人としている⁽⁴⁾。出産育児に関する情報源の上位には、雑誌、インターネット、携帯サイト・配信サービスが挙げられる⁽⁵⁾。母親は、子育てに関する様々な情報を雑誌やインターネットから手軽に得やすい状況にある。しかし、手軽に得られる回答は、あくまでも一般論である。自分の悩みにあった答えを探し出し納得できればよいが、得られた情報と親自身が置かれている状況が異なれば、さらに疑問が膨らみ余計に不安に陥りやすくなる。

2 子育てにおける両極的感情

子育て意識について整理してみよう。首都圏で乳幼児を持つ約3,500世帯に対し、15年間、子育て意識について調査した結果では、8~9割の母親が、肯定的感情(「子どもがかわいくてたまらないと思う」「子どもを育てるのは楽しくて幸せである」)を持っており、その割合は10年間変化がない。また、否定的感情(「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になること」「子どものことでどうしたらよいかわからなくなること」)や子育ての負担感(「子どもがわずらわしくていらいらしてしまうこと」「子どもに八つ当たりしたくなること」)も持っているが、2010年時点で、否定的感情や負担感を持つ割合も緩やかに減少傾向している⁽⁶⁾。これらのことは、子どもを

育てていれば、楽しさや嬉しさ、子どもの成長を実感できる喜びを感じるが、同時に心配や不安、不満、焦りや負担も感じ、子育てをしているほとんどの親がその両極の感情を持ちながら子育てをしていると説明できる。また、否定的感情や負担感も、何らかの働きかけにより改善の見込みがあると言える。

以上のように、子育てには肯定的感情と否定的感情が存在しており、それら2つの感情を以下では「両極的感情」と呼称する。

3 育児不安における2つの側面

子育てにおける両極的感情（肯定的感情と否定的感情）には、「今」と「将来」に対する感情が含まれている。「今」を肯定的に受け止めることができれば肯定的感情は高まるが、否定的に捉えると子どもに対しても親自身に対しても否定的感情を強めてしまう。「将来」についても同様で、否定的に捉えると今をより苦しいものとし、子育ての負担感を強めてしまう。このように考えると、育児不安は、子育てにおける否定的感情から生じていると言ってよい。

子育てにおける否定的感情や不安は、子どもを育てている「親」としての自分から生じるものと、「一個人」としての自分から生じるものがある。この点について柏木（2008）は、第1の悩みは「育児と子どもについての不安や悩み」（子どもの行動にイライラする、子どもの育ちに心配がある、しつけがうまくいかないなど）、第2は「親としてではない生活や活動から疎外されていることに起因する不安や不満」（母親であると共に自分の生き方も確立したいと焦る、親としての責任に縛られているなど）であり⁽⁷⁾、これらが「育児不安の元凶」と述べている⁽⁸⁾。さらに柏木は、第1の不安より、第2の不安がはるかに強い不安であると言及していることは、注目に値する⁽⁹⁾。

つまり、育児不安とは、子どもに対する両極的感情と、親自身に対する「親」と「一個人」の両側面の感情がある。さらに説明を加えると、親が悩みや不安を持つ場合、両極的感情と両側面の感情を混同させ、不安や悩みをより複雑化しているところに注意すべきである。

II 幼稚園における子育て・親支援

1 幼稚園における子育て支援

幼稚園教育に子育て支援が導入されたのは、文部省（現・文部科学省）中央教育審議会が1996年7月「21

世紀を展望した我が国の教育の在り方について」をまとめたことが始まりである。幼稚園は、「地域における子育て支援の1つの核として、親などを対象に、幼児教育相談や子育て公開講座を実施したり、子育て交流の場を提供したりするなど、地域の幼児教育センターとしての機能を充実し、家庭教育の支援を図っていくこと」が求められた⁽¹⁰⁾。2001年、文部科学省制定「幼稚園教育振興プログラム」では、幼児教育に関する施策の総合的な実施計画が打ち出され、「幼稚園の基本を生かす中で幼稚園運営の弾力化を図り、地域の幼児教育センターとしての子育て支援機能を活用し、『親と子の育ちの場』としての幼稚園の役割や機能を重視する」と示され、幼稚園は子どもだけでなく、親が育ち場としての役割が求められるようになった⁽¹¹⁾。

2005年の「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の方向性」答申で、「親の子育て環境などの変化—家庭の教育力の低下—」について、女性の社会進出に伴う仕事と子育ての両立、自己実現を目指す中での出産や子育ての捉え方の変化、単に子育ての肩代わりをするのではなく、子育てのストレスを軽減しつつ、子育ての喜びを感じ、子どもの豊かな育ちにつながるような支援が望まれると記述されている⁽¹²⁾。続く2006年の「幼児教育振興アクションプログラム」⁽¹³⁾、2008年改訂の『幼稚園教育要領』では、幼稚園における子育て支援の機能として、地域への幼稚園の開放、教育相談の充実、情報提供、保護者同士の交流の場を設けるなど、なお一層、地域の幼児教育センターとしての機能を高めることが盛り込まれた。

幼稚園教育要領改訂と同年の2008年、子育て支援に関する研修プログラム作成協力者会議において、「幼稚園における子育て支援に関する研修について—研修プログラム作成のために—」が作成された。子育て支援の基本的考え方として、「親と子が共に育つ」「保護者の子育てに対する意欲」など家庭の教育力向上が重視された。また、「不安やストレスを解消」「喜びや生きがいを見出す」「自尊心を確認あるいは回復」など親の心理的配慮が加えられ、支援者と支援を必要とする者が双方向に「育ち合いの場」を創り出す必要性が提示された⁽¹⁴⁾。

また、文部科学省「幼稚園における子育て支援活動及び預かり保育の事例集」では、①幼児期の教育の相談、②情報提供、③未就園児の親子登園、④保護者同士の交流の機会、⑤園庭、園舎の開放、⑥子

育て公開講座の開催、⑦高齢者、ボランティア団体、子育てサークルなどとの交流、⑧父親を対象とした活動等が挙げられている⁽¹⁵⁾。さらに、『幼稚園教育要領』では、「地域の子どもの成長、発達を促進する場」「保護者が子育ての喜びを共感する場」「子育ての本来の在り方を啓発する場」「子育ての悩みや経験を交流する場」「地域の子育てネットワークづくりをする場」など、各幼稚園を取り巻く状況に応じた様々な支援の役割が求められている⁽¹⁶⁾。対象は、保護者だけでなく、未就園児の親子から高齢者まで地域全体へと広がってきている。内容は、個別や小集団活動、園庭開放のような子どもと親の遊び場の提供、情報提供や交流活動の拠点など多岐に渡る。

幼稚園の子育て支援実施状況について、2005年6月1日時点における調査では、何らかの子育て支援をしている幼稚園が公立4,355園（全体の78.1%）、私立6,390園（76.8%）、全体では10,745園（77.3%）であり、約8割の園が子育て支援を実施している⁽¹⁷⁾。実施形態や活動内容は様々であるが、各幼稚園が、子どもの育ちや子育て、親の育ちに対し、幼稚園教育の特色を生かした環境を通して行う支援が望まれている。幼稚園教育に即した子育て支援の開発には議論の余地がある。

2 幼稚園に求められる親支援

荒牧美佐子・無籐隆（2008）は、「負担感」には親側の「育て方」と子ども側の「育ちへの不安感」に分類されるが、「負担感」に関しては、幼稚園群の方が保育所群よりも、専業主婦の方が有職者よりも高い傾向との結果を得ている⁽¹⁸⁾。ベネッセ次世代育成研究所報告によると、働いている親に比べて働いていない親は、「トイレトレーニング」「生活リズム」「言葉の遅れ」「メディアの与え方」「遊び場」などで強い負担感を感じていることが分かる⁽¹⁹⁾。働いている親は、一定時間子どもと離れ、その間保育所等に預けることができるが、働いてない親は、食事、排泄、運動から睡眠などを基本的に母親1人が負担しなければならない状況にあり、一個人としての時間が持ちにくいことが考えられる。幼稚園における子育て支援の在り方について、荒牧美佐子（2008）は、「親の育ち」について、園から家庭に向けた一方的なものでない「保護者と保育者とが、地域との結びつきを基盤として支え合い、助け合いながら、子どもの成長・発達を見守っていく体制」「保護者や保育者も同じように子育てを通じて変化していくといった視点に立

つ」重要性を述べている⁽²⁰⁾。

子育て支援策は、1989年合計特殊出生率の低下（いわゆる1.57ショック）以降、経済的援助（子ども手当）を中心に行ってきたが、今なお少子化の改善につながっていない⁽²¹⁾。その理由として考えられることは、親が単に支援を受ける側であったことに1つの要因がある。つまり、親を支援を受ける側に置くことで、心情的に「支援を受ける＝弱い立場」という意識を強めてしまい、その結果、親自身の主体性を弱めてしまう側面があると考えられる。子育てには楽しいことも苦しいこともあるが、それでも子育てには喜びや幸せがある。このように考えると幼稚園教育における子育て支援とは、子どもが教育的価値のある意図された環境の中で育ち合っていくように、親についても、親の主体性に働きかける環境が構成され、親同士で育ち合っていくことが妥当であると言える。幼稚園に求められる支援という観点から見ても、子どもと共に親が成長できるように感じられる親支援の環境の確立は重要であると考えられる。

3 「育てる」を通して親が「育つ」支援

柏木（2001）は、「母親個人として生きる場と時間、機会を保障」「育児から解放し、自分の時間をもち自分の成長／発達の機会をもてる」⁽²²⁾「大人も子どももそれぞれの好奇心と力に基づいて、自分で能動的に試行錯誤し失敗もしながら発見しやり遂げてゆく、そのような育ちの場、時間空間を提供」など、これまでほとんど顧みられていなかった「育てる」から「育つ」への発想の転換の重要性について言及している⁽²³⁾。また鯨岡峻（2002）も、日本における子育て支援が「育てることの喜び」「育てることが育てられることでもある」ではなく、「育てることの難しさ」を主張するものが多いと述べ、悲観的印象で用いられている点について指摘している。さらに「喜び＝難しさ」の両面をもつのが「育てる」ことの内実であり、その両面を経験するから、人は「育てる」ことを通して人間的に成長する支援の意味や意義を問い直している⁽²⁴⁾。加えて、柏木（2008）は、育児とは「親に人間的な成長をもたらすこと」「畏敬の念を抱くこと」「自分の存在価値を確認」「ひとりの大人として学び育つことの必要性を認識」と述べている⁽²⁵⁾。

これらの考え方は、子育て支援に対する新しい観点や機能をもたらすと捉えることができる。子育てをする時期は、親にとって自分の思い通りにならず辛いこともあるが、子どもと共に親が成長し合える

機会ともなる。家庭の事情や悩みが異なっているとしても、子育てを通して親が育つという視点は、すべての親に当てはまる。子育ての時期に子どもを「育てる」だけでなく、親も「育つ」視点に立つことは、積極思考であり、子育て支援の概念も変わる。そのためには、「育てる」支援ではなく、「育つ」ための教育的視点をもった支援であることが重要である。

Ⅲ 親支援の方向性の検討

1 親が望む親支援の方向性

筆者（第一著者）の勤務する幼稚園では、子育て支援の一環として「親の会」を開催してきた。参加者は、幼稚園在園児、卒園児の保護者である。未就園児（在籍児の弟妹）を連れてくる保護者もある。開催日程は、年間1回広報するが、活動内容は、親の動機や興味を基に進行する。親の参加は自由で、各回4名から20名である。副園長1名が支援者として参加している。参加経験の長い保護者は、菓子や手作りパンなどを持ち寄ることもある。参加者は、学級や学年を越えて交流を持ち、「次は何をしようか」と参加者同士で約束し合って再会を楽しみにしたり、互いの子育ての悩みを自然に話し合ったりなどしている。

『幼稚園教育要領』第3章第2にある「子育て支援」では、「各幼稚園を取り巻く状況に応じて、様々な役割が求められる」とあり、「自然に足が向くような憩いの場を提供するように配慮」し、「幼稚園の実態に応じ、できることから着実に実施していくことが必要」とある⁽²⁶⁾。これに加え、幼稚園における支援の「環境」をどう構成するか、開発を試みている。そこでまず、「幼稚園における親支援について考えるとき、利用する親にとって、今後どのような場を幼稚園に望むか」を把握することにした。

本論で考察する親の会は、20XX年9月～1月（年間5回）の活動のうち第1回と第4回である。

(1) 親が今思っていること

20XX年9月11日（第1回目）親の会で「今思っていること、考えていることをみんなで共有しよう」というテーマを掲げ、参加者に付箋（7.5cm×7.5cm、枚数は自由）と筆記用具を配り、KJ法を行った。参加者が、それぞれ情報をカードに書き出し、似かよった意味を類型化して参加メンバーの考えや情報を把握し、気付きの促進やアイデアの提出を目指すものである⁽²⁷⁾。第1回目の参加者は、昨年度より継続参加の親と初参加の親がいた。挙げられた主な意見を以下に示す。

- | |
|---|
| <p>1 子どもの成長・発達</p> <ul style="list-style-type: none"> ①夜の寝付きが悪い。 ②言葉をはっきり喋らない。 ③何があっても生き抜く力を持って欲しい。 ④発達障害児の将来が心配。 ⑤育児書を読んでみても自分の子どもの成長に当てはまらないことが多い。 ⑥娘の食欲が止まらない。 <p>2 しつけ・生活</p> <ul style="list-style-type: none"> ①子どもが怒った時の沈め方。 ②よその子の叱り方。 ③テレビとゲームの悪影響をもっと伝えてほしい。 ④きょうだいげんかが始まったらどうするか。 ⑤きょうだいげんかのおさめ方。 ⑥子ども3人が別々に話しかけてきた時の対応について知りたい。 ⑦テレビのない生活。 ⑧お片付けてどうやったらスムーズにできるか。 |
|---|

一番多く見られた意見は、「子どもの成長・発達」と「しつけ・生活」であった。「言葉をはっきり喋らない」「育児書を読んでみても自分の子どもの成長に当てはまらないことが多い」という悩みに並行し、「何があっても生き抜く力を持って欲しい」「成長に役立つ遊び方を知りたい」など挙げられた。また、それらの意見に対し、「そうよね」「分かる分かる」「私も一緒」と声が上がリ、1つ1つの意見や思いに潜む否定的感情や肯定的感情を共感しながら、両極的感情を抱えているのは1人ではない、ということが共有されていった。子育てを中心に生活する母親は、両極的感情について自覚できており、それを他の親に語ることで、共有や共感し合っていた。また、感情を共有することで、他の親の考え方や子育ての価値観に触れていた。

また、「子どもが怒った時の沈め方」「いじけた時の対応が知りたい」など幼児期の子どもとどのようにつきあっていけばよいのかという悩みが多く語られているが、これらは、自分の子育てをよりよいものにしたいとする母親の前向きな気持ちの現れである。子育ての知識や要点については、先輩の母親が自分の体験談を語り出すと、他の親達が自然に聞き入っていた。

さらに、「1人の時間が欲しい」や「ゆっくり寝た

い」など1人の人間としての悩みや願いも挙げられているが、これら「一個人」の意見も自由に述べてよいということが共有されると、安堵感を持ち、会話が展開された。

(2) 思いの実現に向けて

取り組み(1)から、親の思いの一端が明らかになった。そこで引き続き、20XX年9月11日後半部分で「親の会として取り組みそうなこと」という主題で、取り組み(2)を行った。挙げられた主な意見を以下に示す。

1 学ぶ

- ①子どもと大人の違いについて講演会的なことがあればいい。例えば、大人と子どもの視野の違いを知ってびっくりしたので、筋力発達の違いとか。
- ②子どもの発達についてゆっくり相談したい。
- ③子ども、子育ての悩みを話す場が欲しい、愚痴を言う、アドバイスをもらいたい、共感できればいい。
- ④消毒を使わず、傷の手当ての仕方の講習。
- ⑤育児の悩み相談をネットなどで簡単にできる。

2 遊び・活動

- ①家ではできない遊びができる場所があればいい。
- ②未就園児をもっと園に遊びに来させたい。
- ③未就園児が他の子どもと触れ合える機会が欲しい。
- ④未就園児の親子で外にお出かけ。

3 託児

- ①園行事の時など下の子どもの預かりなどがあると嬉しい。
- ②格安の託児があったらいいと思う。
- ③託児、土日や役員の仕事などちょっと預かって欲しい時がある。
- ④幼稚園の行事、特に参観の時、下の子どもの託児が園にあると、ゆっくり観られるので嬉しい。

4 生活を豊かに

- ①子どもとできるお菓子作り。
- ②編み物の初歩。
- ③指ぬき。
- ④スクラップブック。
- ⑤ガーデニング。
- ⑥アロマ。他

取り組み(1)に続く(2)では、具体的意見が挙がった。例えば、「子どもの発達についてゆっくり相談したい」「子ども、子育ての悩みを話す場が欲しい、愚痴を言う、アドバイスをもらいたい、共感できればいい」などは、他の親も自分と同じような思いを抱えていることを知り、互いの抱える悩みを具体的に共有し、解消に向けたいとす現れである。同時に、自分1人の悩みではないことを共有できたことで、親自身が学びたいことや、知りたいこと、相談をしたいこと、整理したいことなどの意見が多数挙がった。また、他の親の意見を受け、付箋に意見を書き足す親の姿も見られた。また、託児に関する意見や幼稚園に対する要望も多く挙がった。「生活を豊かに」では「スクラップブック」「指ぬき」など、幼稚園で親同士で実現可能な範囲の活動が具体的に挙げられているが、これらの活動は、次年度以降、親の会で実現されていった。「ガーデニング」は、親が運営する部活動となり、花や野菜の手入れを園と連携して計画するなど、親の自主的な活動として進められていった。

このように、親同士が悩みを語り合い認め合うことができるようになると、子育ての仲間意識が生まれてくる。支援者は、親達の話をも認めたりつないだりした。

(3) 親支援として園に望むこと

園における親支援をどのように展開していくかを考えるため、参加者で話し合う場を持った。20XX年11月29日の親の会に参加した保護者4名に研究の目的と趣旨を説明し、会話を録音する旨の了承を得た。「親支援として園に望むこと」を主題とし、可能な限り再現できるようにした記録を以下に述べる。

1 安心して子どもが遊べる場

- ①下の子を遊ばせる場が欲しい。
- ②親子で遊べる場、子どもが遊ぶ場が欲しい。
- ③大人は大人で好きなことを喋ってやっていて、その周りを子どもは好きに遊んでくれていて、たまには(子どもが)来るけれど、べったりでないのがいい。

2 ストレス発散・息抜き場

- ①子どもがいたら家で離れられないから、もしかしたら、ここへ来ても抱っこ抱っこ離れられないかもしれないけれど、話している人や自分が喋っているだけで(人が喋っているのを聞くだけで)、家でイライラするよりはいい。

- ②家にいるとついつい家のことを先にしてしまうから、やりたくても後回しになって、他のことが目に付いてしまう、家の中ではできないことができる。
- 3 助け合いの場
- ①子どもはこうやって遊んでいる間に、おばちゃん（親同士）に慣れれば、ちょっと買い物や病院行きたい時に子どもを預けて、こっそり抜けられればいい。
- 4 同じ感覚の人と交われる場
- ①（子どもが遊んでいるときに怪我をしたらどうしようかという場面では）それがだめな人は連れてこないじゃない。
- ②ここへ来ている人はこういう感覚の人。
- 5 場集うきっかけと参加の継続
- ①子どもはこの場で馴染んで、こういう場所だって覚えるけど、その時だけやってきて、子どもも親も馴染めないままだと子どもがべったりで、回数を重ねないとよさが分からない。
- ②確かに1回目に来た時には、家に帰ると母子共にぐったり、久しぶりに疲れたなと思って、あんまり知らない人と話す機会がないから、知っている人と喋るばかりで、でも2回目来たら、顔も合わせているし、知っている顔もあり、だとしたらだんだん楽しくなってくる。
- ③何か特別にこれをしようとしなくても、みんなが集まって、どんどん顔を知った人と話をするだけでもいい。
- ④（手芸など）作ったらすごいけど、その子どもの機嫌が悪くて（何も）できなくても、（この場に）来てなんとなく（その場にいるだけでいい）。
- ⑤家にいても1人では何も作る気がしない、何もなくても、ただ顔馴染みの親に会う居場所があるだけで十分よい。
- 6 回数
- ①月に1回だと自分（親）はいいかもしれないけれど子どもが（場）を忘れてしまう。
- ②あれくらいの子は、頻繁に（顔馴染みに）会ってないと。
- ③もうちょっと全体的な人数が増えた時は、毎週ぐらいでも日があって来られる日に自由に来る（方がいい）。

- ④毎週何曜日何時くらいから開いていますよ、とか言ってもらえると来やすい。
- 7 今後の場
- ①今日、何があるか分からないけど来てみる。
- ②個人的に喋りながらこれ作ろうと思って、自分は材料持って来て、ここで縫いながら喋っている。
- ③（家で）やりかけのものを持って来て（やっていて）、そこで興味が広がって（友達と）一緒にやらせてもらう。
- ④（友達のを）のぞきながら喋っているだけで、やっている方もまた楽しくて、喋っている方も楽しい。
- ⑤（没頭し出すと）喋らない人がいてもいい、それでもいいよね、でも、うなずいているでしょう。
- ⑥（他のいろいろな話が）刺激になるよね。
- ⑦（やることが）出尽くしたら、またそこで考えたらいいわけで。

親支援を考える場合、親達が先ず望んでいるのは「安心して子どもが遊べる場」であった。さらに、子どもと適度な距離を取り、「一個人」の時間を確保できる「ストレス発散・息抜き」の場を求め、親同士で未就園児を預け合うことができないか模索していた。さらに、子育てや親同士の交流を持つ場合、「同じ感覚」が持てることを重要視していた。例えば、子どもの怪我を「あってはならないもの」と捉えるか、「小さな怪我や失敗を繰り返しながら大きくなる」と考えるのかによって子育ての捉え方が異なる。本論の事例にある親達は、後者の捉え方を支持していた。

次に、20XX年度初参加した親の「場集うきっかけと参加の継続」に着目すると、「確かに1回目に来た時は家に帰ったら母子共にぐったり」「あんまり知らない人と話す機会がない」と、未就園児を連れて参加することへの負担感が語られている。しかし、第2回目以降の会は、「だんだん楽しくなってくる」と他の参加者の同意を求めるように語り、それを受け、継続年参加（先輩）の親達も「どんどん顔を知った人と話をするだけでもいい」「ただ顔馴染みの親に会う居場所があるだけで十分よい」と初参加の親の意見を補足していた。これらのことは、参加年数に関わらず、会に参加することで新たな関係での交流が進み、同時期に子育て期にある者同士の新しい仲間関係が形成されていることを示唆している。「回数」に

ついては、頻繁に会うことで未就園児同士のかかわりを持たせることや、未就園児を連れて参加することを親同士で容認していた。「今後の場」は、「何かあるかわからないけど来てみる」「一緒にやらせてもらう」「喋らない人がいてもいい、それでもいいよね」と親同士が語り合っていた。これらのことは、家庭の事情や親の性格が異なっても、互いの立場を尊重し合える関係性が生まれ、親同士で積極的に支え合い、子育てを肯定的に受け止めようとしていることを示している。

このようにして、親達は、子育ての基礎となる部分では「同じ感覚」であることを共有しながら、人とゆるやかにつながっていた。ゆるやかにつながる環境は、子連れで参加する親、話が苦手な親などを含め、参加する全ての親の存在価値が認められ、悩みや思いを気軽に話しやすい関係が築かれていた。また、「何かあるかわからないけど来てみる」「出尽くしたらまたそこで考えたらいい」などは、「親の会」を自主的に運営しようとする親達の意識が認められる。

IV 親支援の方向性の検討

1 支援の方向性

幼稚園が行う親支援として、どのような環境が求められているのであろうか。求められている要件としては、先ず「安心」が挙げられる。子どもを安心して安全に遊べる環境が確保できた上で、親が子育てや自分自身について着目できる。もう1つの安心は、仲間が集える、互いに尊重し合うことである。子どもが一人一人違うように親も皆違い、子育ての在り方も多様性がある。しかし、一生懸命に子どもを育てている、という点では同じである。同時期に子育てをする親が集い、悩みや不安を共有し、刺激を受け合うことは、他の価値観に出会い、互いの子育て観を交流させることができる。

次に、子育てにおいて同じような「感覚」が持てることも重要であることが示された。価値観が広がった現代においては、子育てにおける価値観も様々である。子ども同士の喧嘩や怪我の捉え方も、ある親にとって「子どもなら当たり前のこと」が、別の親にとっては、「決して許せないもの」となってしまう。ある程度、同じような価値観が持てる場が、望まれている。比べられたり否定されたりすることがない場であることが分かれば、親の緊張感も和らぎ、他の親との交流が促進されるようになる。さらに「自分の子ども

もが、他のお母さんと遊んでもらっているのを目にする」ことは、子育ての視点を広げ、「ゆとり」をもたらす。そうした子育てのゆとりを取り戻す環境があることで、親はようやく自分自身に目を向けられるようになる。

全ての参加者が求めていたことは、ただ人の話を聞いたり自分の話をしたりする、ということであった。作業の進捗にかかわらず、何か作業をしながら話す方が、身構えないで話をしやすい様子も確認された。親の会は制約がないところが特徴であり、制約がない、ゆるやかなつながりを共有することが目的といてよい。未参加の親を勧誘する話題では、「来てみないとわからない」「どう説明してよいかわからない」と、具体的な言葉で表現できないが、親の会の充足感を共有していた。

2 つながりを避ける親達

一方で、園内で行われている「親の会」へ誘いかけても、そこに加わりとうしない親もいる。ある親に声を掛けたところ、「家事をしないといけない」と断られたこともある。ただ、しばらく話を続けると、「(他の)お母さんと話すのが苦手」「親同士の関係が固まっているように見え、馴染めない」「昔(学生時代)からつきあっている友達に話すだけで十分」「親睦会とかもストレスである」「(新しい親に)プライベートの話を最初から話すのが面倒」などの言葉が次々に出て、親同士の場に入りたくない理由が語られることがあった。この母親は1年後、筆者(第一著者)に個別相談したい申し出があり、就学前まで数回面談を行っている。この事例は、あまりにも母親の不安や悩みが強い場合には、親の会に参加することができないこと、このように親の会に参加できない親に対する個別な対応は、親の会とは別に支援の必要性があることを示唆している。言い換えれば、親の会に参加することができる親は、不安や悩みはあっても、参加できている時点で、ある程度子育てを前向きに受け止められていると言える。

また、親の会に積極的に参加している親でも、地域の子育てサークルへの参加について、「役員が回ってきて面倒くさい」「お世話係や役割分担が回ってくる」「参加するのはいいけど主催はいや」など、敬遠しがちな親も多い。加えてPTA活動は、近年、役員を率先して引き受ける親が少なくなっている。役員選出の際に、子ども1人につき1回は受けるという決まりを設けたり、前年度の役員が個人的な人間関係の

中から新しい役員をお願いしたり、それでも決まらない場合には、抽選などで決めたりする場合もある。PTA 活動自体を取りやめてしまう学校園がある。核家族化が進み、自分で自分の子育てをするだけで精一杯である親にとって、他の子どもや学校、地域の世話まで担う余裕はないと感じている親が、増えてきていることが示唆される。

以上のように、現代社会では、新しい人とかわることが心情的に負担になり、つながりを避けがちな親もいる。しかし、こちらからの働きかけによって、新たな人間関係を結ぶことができる親がいることも確かである。そのような親は、内心では興味や関心、期待を持っているものの、自らでは人間関係を築くことが難しい。何かのきっかけで人や場とつながることができれば、その親の興味関心に合った支援を模索することができる。

このように、多様性のある親の心情を受け止め、親の主体性に働きかけられるきっかけを探りながら、つながりを支える環境を構成していくことが、親支援における今後の課題である。

3 人とのつながりを支える親支援

門脇厚司(1999)は、「社会力」について、「主体的に、好ましい社会を構想し、作り、運営し、改革していく意図と能力」⁽²⁸⁾「(人間関係を維持しながら、自分の知識や、努力し得た技術や技能など)社会のそこで、誰かのために、あるいは何かのために役立つようと、自分から進んで発揮し活用する」⁽²⁹⁾と述べている。この「社会のそこここ」の1つが幼稚園における「親の会」に該当し、「人間関係の中にあることが自分自身の喜びにつながり、自信や意欲や自尊心を高め、自分の存在価値を自覚すること」⁽³⁰⁾ができる場と言える。

親同士の会話記録を追っていくと、上述の「社会力」の育ちを期待しているものの、先ずは、人とのつながりを支えにしたい思いが見受けられる。例えば、「下の子を遊ばせる場が欲しい」「親子で遊べる場、子どもが遊ぶ場が欲しい」「特別にこれをしようとしなくても、みんなで集まって」「今日、何があるか分からないけれど来てみる」という意見には、場を通して親も子どもも「誰かといい関係を作りたい」という思いや期待が現れている。さらに、「大人は大人で好きなことを喋っていて」「子どもはこうやって遊んでいる間におばちゃん(他の親)に慣れれば(よい)」「あんまり知らない人と話す機会がないから、でも2回

目来たら、顔も合わせているし、知っている顔もあり、だとしたら、だんだん楽しくなってくる」という意見が聞かれたが、これらは「つくり上げたい関係を維持」したいという声である。そして、母親の「家にいるとついつい家のことを先にしてしまうから、やりたくても後回しになって、他のことが目についてしまう」「もしかしたらここへ来ても抱っこ抱っこ離れられないか。かもしれないけれど」「家でイライラするよりはいい」という声は、「人間関係の中にあることが自分自身の喜びにつながり、自信や意欲や自尊心を高め、自分の存在価値を自覚すること」である。人とかわかることで自分の状態が良くなるという意見には、人とつながることで自分のゆとりが生まれ、安定した気持ちになる期待も含んでいる。

夫や親族の協力も得られず、近所との付き合いもなく、孤立した中で子どもを育てている状態は「孤育て」と表現される。しかし、母親も子育てをする以前は、「一個人」の女性として、社会で生活していた。その「一個人」が親となっただけで、人間自体は変わらない。さらに、子どもを産み、親となり、子どもを育てるという経験をした存在である。そのような親同士が、交流することだけで意義がある。「一個人」を他と共有することができ、新たなつながりが生まれる。また、自分の経験が他者の役に立つという喜びは、自分の存在価値を高め、社会力を育む契機となる。つまり、子育てを同時期にしている人とのつながりを支援することは、育てることを通して社会力が育つ親支援としても有効であると言える。

4 幼稚園教育における親支援の課題

幼稚園教育は、家庭との連携が不可欠であり、その連携の大部分は、保育に関する内容であることが多い。しかし、子どもの生活は連続性があるため、幼稚園と家庭の教育観は、同じ方向性であることが望ましい。また幼児期は、人間の基礎を培う重要な時期であるが、子育ての第一義的責任は親にあり、幼稚園教育の期間は、人生にとってわずか数年のことである。このように考えると、子育ての価値観が多様化し、家庭の教育力が低下する今日では、家庭が子どもの成長発達にとって重要であると言える。そのため、幼稚園教育が保育を提供すると同時に、親の教育力を補い助ける役割が求められていることは明らかである。なぜなら、幼児期に適切な保育が保証されたとしても、幼稚園が子育てを肩代わりできるものではない。子どもの人生に責任を負い、生涯、

子どもの成長を見守り続ける役割を担うのは親である。

幼稚園に求められる親支援とは、子育ての「今」を共有する環境を構成し、「将来」持続性ある子育て力の育成に向け援助すること、すなわち、親支援を通じて子どもを支援していくことが重要であると考えられる。

V 総括

以上、本論では、幼稚園教育における親支援の方向性について、幼稚園における実践を基に検討した。幼稚園における親支援の試みは、ゆるやかにつながる環境を基盤とし、親が自ら多様性に気づき、価値観の変容をもたらしていた。また、人的つながりを支えとし、親自らが子育て力を回復することは、幼稚園教育が、親を通じて子どもの成長発達を支援することを意味している。

今後の課題としては、親支援の具体的な実践例の分析、支援者の専門性の確立、また、つながりを持たない親に対する支援、発達障害のある子どもを持つ親支援の在り方について詳細に検討する必要がある。

註

(1) 柏木恵子：『子育て支援を考える—変わる家族の時代—』, 岩波書店, 2頁, 2001年.

(2) 大日向雅美：「育児不安とは何か—発達心理学の立場から」, 『こころの科学』103, 10頁, 2002年.

(3) 持田聖子：「はじめての妊娠・出産と親準備」, (次世代育成研究室：『第2回妊娠出産子育て基本調査〔横断調査〕報告書』), ベネッセ教育総合研究所, 26頁, 2013年.

(4) 宮本幸子：「はじめての育児生活」, (次世代育成研究室：『第2回妊娠出産子育て基本調査〔横断調査〕報告書』), ベネッセ教育総合研究所, 41頁, 2013年.

(5) 持田・前掲書(3), 27頁.

(6) 荒牧美佐子：「子育て意識」, (次世代育成研究室：『第4回幼児の生活アンケート報告書』), ベネッセ教育総合研究所, 88-92頁, 2011年.

(7) 柏木恵子：『子どもが育つ条件—家族心理学から考える』, 岩波新書, 8頁, 2008年.

(8) 柏木・前掲書(1), 20頁.

(9) 柏木・前掲書(7), 9頁.

(10) 文部科学省：「21世紀を展望したわが国の教育の在り方について(第一次答申)」, 1996年,

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19960719001/t19960719001.html (2014/12/26 閲覧)

(11) 荒牧美佐子：「園における子育て支援の実際」, (無藤隆・安藤智子/編：『子育て支援の心理学』), 有斐閣, 200頁, 2008年.

(12) 文部科学省：「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の方向性」, 2005年, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05121401.pdf (2013/03/05 閲覧)

(13) 文部科学省：「幼児教育振興プログラム」, 2001年, <http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/040200/nintei-kodomoen/pdf/keisai-genkou/10action-program.pdf> (2013/03/05 閲覧)

(14) 子育て支援に関する研修プログラム作成協力者会議：「幼稚園における子育て支援に関する研修について—研修プログラム作成のために—」, 2008年, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afielldfile/2009/03/16/1258023_1.pdf (2014/12/25 閲覧)

(15) 文部科学省：「幼稚園における子育て支援活動及び預かり保育の事例集」, 2頁, 2009年, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/_icsFiles/afielldfile/2009/03/23/1258040_1_1.pdf (2014/12/25 閲覧)

(16) 文部科学省：『幼稚園教育要領解説』, フレーベル館, 239頁, 2008年.

(17) 荒牧・前掲書(6), 202頁.

(18) 荒牧美佐子・無藤隆：「育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い：未就学児を持つ母親を対象に」, 『発達心理学研究』19(2), 日本発達心理学会, 87-97頁, 2008年.

(19) 宮本・前掲書(4), 37頁.

(20) 荒牧・前掲書(6), 213-214頁.

(21) 小川博久：「『保育』の専門性(第2部 保育の歩み(その1))」, 『保育学研究』49(1), 日本保育学会, 100-110頁, 2011年.

(22) 柏木・前掲書(1), 49頁.

(23) 柏木・前掲書(1), 50頁.

(24) 鯨岡峻：「<育てられるもの>から<育てる者>へ関係発達の視点から」, 日本放送出版協会, 33-34頁, 2002年.

(25) 柏木・前掲書(7), 195-197頁.

(26) 文部科学省：前掲書(16), 239頁.

(27) 中坪史典・境愛一郎・中西さやか：「子ども理解の方法としてのKJ法—子どもの遊びの姿から学びを可視化する」, (中坪史典/編：『子ども理解のメソ

ドロジー実践者のための質的実践研究アイデアブック』), ナカニシヤ出版, 19-34 頁, 2012 年 .

(28) 門脇厚司:『子どもの社会力』, 岩波書店, 1999 年, 63 頁 .

(29) 門脇厚司:『社会力を育てる—新しい「学び」の構想』, 65 頁, 岩波書店, 2010 年 .

(30) 門脇厚司:前掲書(29), 66 頁 .

Evolution of the Parents Support through enhanced Social Ties in Kindergarten Education

Yoshiko MUSHIAKE^{*1}, Osamu NISHIYAMA^{*2}, Toshiyuki TAKAHASHI^{*2}

The purpose of this study is to explore the evolutionary process of the parent assistance by supporters in kindergarten. It is found that the parents with ambivalent mood and anxiety toward child care could be improved in their attitude positively through the experience of social ties sharing the feeling of relief, sympathy and affluence in mind. In addition, it is suggested that proactive policy for child care under an environment arranged in accordance with the interests and demands of the parents. Establishment of the expertise among the supporters remains as a future tasks.

Keywords: kindergarten education, Social ties, parents support, child care support for families, environment

※ 1 Graduate School of Education (Master's Course), Okayama University

※ 2 Graduate School of Education, Okayama University
